

変化が起こす変化(1)

村田 愛

ポジティブサポートは、「変化」を生みます。その変化は、時には目の輝きを増すことであつたり、生きる意欲をもつことであつたりします。この連載の二回に分けて、ポジティブサポートを取り入れ、継続することで

「変化」が生れたアダムの場合を紹介します。その変化はどのように生れたのでしょうか。そして、どのようにその変化が生かされたのでしょうか。変化が生かされることでどのような力が生まれたのでしょうか。

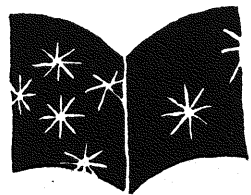
*

最近私は過去にさかのぼり、私が（アメリカで）大学時代通った公立の養護学校小学部の実習先でのビデオを見てみました。その頃に私はポジティブサポートに出会い、どのようなことに心を砕いていたのか、初心を思い出すためにも見てみたいと思っただけでした。大学でいくつかの授業をとりながら週二十時間の実習をうまく時間的に割り振り組み立てられていた毎日の生活。その頃の生活は、毎日をこなすことに精一杯で、時間に追われ焦りと不完全燃焼的な感覚で一杯だったように記憶しています。けれど、日々実習先で生徒たちと関わり新たな発見をし、みんなで笑いあった光景がビデオには映っていません。任せられたレッスンプランについて目標以上に達成感を感じられた時のことや、生徒達との楽しいやりとり、それぞれと関係が深まっていく手ごたえのある充実感を覚え何度となく救われたように感じたことなど、忘れかけていた貴重な経験がよみがえってきました。現実の変化と自分の中での葛藤のくり返しとも言える、向上

心と活気の溢れた生活を思い出しました。

ベスのクラス

私が一学期間（週二十時間）実習した高学年（五、六年生）のクラスは、知的障害、主に自閉症と診断された六人の生徒と、担任の先生ベスとアシスタントのグロリアという構成でした。ベスのクラスは比較的カラフルで、視覚的にもわかりやすいように工夫されていました。クラス内の掲示物には、ラミネートとマジックテープを使用し生徒達が自ら触れられるようになっていました。手作りの時間割りはクラスにある時計の絵で示されました。隣には授業科目が絵と文字で示されラミネートされているものを貼って組み合わせるようになっていています。授業が終わる度に誰かが剥がせるようにそれもマジックテープ使用になっていました。ベスは、クラスのすべてを教材と考え、視覚的にも物と名前



の繋がりを示すことと、その空間をみんなで作りに共有している感覚を大切にしたいと言っていました。

まだ二十代で小柄なベスは、それぞれの生徒達にとっても一生懸命で、常に新しい情報を取り入れ積極的に活用していく姿勢を持っている活発な先生でした。アシスタントのグロリアは、自分の子どもが大学生ということもあり、そのクラスの生徒には孫のように接し、親身になって厳しくするけれど、そこには愛情が感じられました。とても相性のいい異なるタイプのベスとグロリアの二人がクラスの和やかな雰囲気とあつたかなクラスの空間を作り出していました。

実習中にぶつかった最初の壁

アメリカでは、実習生はクラスの担任の先生とほぼ同等に扱われます。ベスの場合は特にフレンドリーで協力的だったので、いつもお互いに相談し計画を立てていきました。その時の相談内容は主に生徒それぞれが参加できる教育的配慮のあるクラス全体のレッスンプランの組

み立て方や、個別の科目別レッスンプランなどです。

アメリカでは、個人に合わせて三ヶ月後、六ヶ月後、一年後の個別の科目別の目標と計画を立て、それを書き出して提出しなければならない個別教育計画書のようなものがあります。それは、学期ごとに教師と生徒と生徒の父兄で見直され、必要な場合訂正していきます。その計画を実際に、個別でありかつその生徒の生活および人生の中で優先順位の高い内容のものにするには、その個人をどれだけ知っているかが必要不可欠になります。

私はその計画を書き実行するにあたって頭を抱えたのはアダムの場合でした。アダムはいつもニコニコしていて、立ち上がりグルグル回りながら優しく自分の頬をたたくのが印象的なハンサムな男の子でした。まわりが話しかけはたらきかける時アダムはニコニコしながら頷くか、言葉が素通りしたかのように感じる程クルクル回り続けるかといった感じでした。

問題だったのは、それ以外わからないことばかりだと

いうことです。その時は「今更ながら」なのですが、「それがアダム」といった感じの感覚で日常が流れていたのかと思うとショックでした。いろいろなものを辿ってみるかのようには、彼の過去の個別教育計画を見直してみても月並みなものが羅列されているだけのような気がしました。

そこで、私が提案したのがポジティブサポートでした。

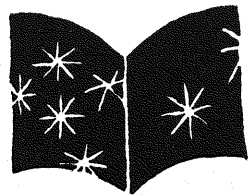
アダムのポジティブサポートを行うにあたって

ポジティブサポートは、ある人をよりよく知り、それを基盤にして、その人の将来を考え協力的に築き上げていく為に行います。つまり、その人をより理解すること、で現実を見つめ直し、これから自分達は何が出来るか、どうしていくことがその人にとって望ましいか、を考えていく作業をしていきます。ポジティブサポートのセッションには、ファシリテーターと本人（仮にAさんといいます）に関わる人達が、Aさんと共に参加し、ファシリ

テーターが掲げる課題に基づいて順番に発言していきます。その課題は、「Aさんの好きなこと」や「Aさんの得意なこと」などです。その課題に基づいて、参加者はそれぞれから見ているAさんについて、できるだけAさんの立場に

立ち、思いつくことを発言していきます。そうして、順番に発言することで、参加者同士が対等感をもち安心して発言できる場がポジティブサポートのセッションです。

ポジティブサポートを取り入れることで、アダムをよりよく知ることと、家族や他のアダムが関わる教育関係者から協力を得られることを私は期待しました。学校で見せる姿、行動はほんの一面で、学校以外でもっと多くの時間を過ごす家庭や生活空間の人間関係を知ることが、アダムを知る大きな手がかりになると、私は特に家



族の参加／協力を期待していました。ところが、アダムの御両親は、仕事と家庭の都合で参加できないと言われました。御両親はそれぞれ二つの仕事を掛け持ちで持っていて、その上アダムにはきょうだいも上にも下にも合わせて三人いるということで、アダムのことを考える為とはいえとにかく時間を作ることができないということでした。もともと公立の養護学校の場合、生徒達はスクールバスで登下校するので、御家族との接触はほとんどありませんでした。家庭内で問題があった時にアダムの鞆に入っている連絡帳に簡単に書いてあるという程度の接触しかありませんでした。極端に言うとう学校と家庭の連携を促す協力体制を築く必要性を感じているのは私たちだけなのかもしれないと無力感と歯がゆい感覚を感じることが多々ありました。

しかし、私が直面している問題は、アダムという生徒のことが驚く程にわからないということでした。どんなことをすると一緒に楽しめるか、また喜ぶか位しかわからず、食べること以外に何に心動かされるのか、どんな

風に生きていきたいのか、どんな目標を持っているのかなどわからないことばかりだったのです。きっかけは、「個別教育計画書」でしたが、それらを知ることが私にとって重要なことであり、それらを踏まえなければ個別教育計画書など書けないと思っていました。

参加者が少ないからといって、ポジティブサポートを行わないという判断はできません。「アダムを知りたい」ここでまた何もしないで日常が流れること程、空しいものはないだろうと思いました。結局、まずはアダムとベスとグロリアそして、アダムのスピーチの先生と私の五人でセッションを行うことにしました。

アダムのポジティブサポート

学校の帰り際の時間を使って、ポジティブサポートのセッションを手短に行いました。その時に行った課題は、「アダムの好きなこと」でした。そこでは、アダムが学校で好んで食べているものが複数出てきました。そ

して、ジャンプしながらクルクル回ること、自分の頬を触れたり、彼に話しかける人や彼の前に座っている人の頬に優しく触れること、トイレにいく時嬉しそうなどの発言がありました。アダムは言葉として発言はしないにしても、彼なりにポジティブサポートのセッションに参加し、他の参加者の発言の番の時には、じーっと発言者の目を見て理解しようとしていました。時にはある発言を聞いて「当たり前！」とでも言うように、ニコニコしながら嬉しそうにクルクル回りは始めることもありました。

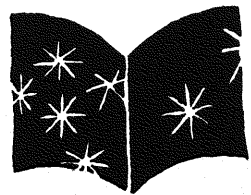
そして、そのセッションが終わり、アダムがスクールバスにニコニコ乗って帰った後、残った参加者達は、なんだかそのセッションや課題の余韻が脳裏から離れないかのようにアダムについて話し続けました。スピーチの先生は、アダムがどんな時に集中するのが実はわからない。スピーチのレッスンの時間が過ぎてきた気がするのと、つまりスピーチのレッスンを終わった時、そのレッ

スンの手ごたえが感じられないけれど、アダムは喜んで楽しそうに過ごしている。しかし、いつもそのスピーチのレッスンは振り出しから始めなければならないと言いました。ベスも似たような感覚で、レッスンをしても手ごたえが

持ちにくいということを言っていました。何が問題なのか、どうすればいいのか、私たちは話し合いました。スピーチの時間に関しては、もしかしたら、教室から連れ出されるからスピーチの時間が好きなのかもしれない。もしくは、スピーチの時の御褒美が嬉しいのかもしれない。「とにかくいろいろと模索しながら試してみよう」と私たちは話し、その日は終わりました。

気づいたこと、実行に移したこと

ポジティブサポートを行った次の日から、私たちはアダムのスピーチのレッスンをアダムを連れ出し別の教室



で行うのではなく、教室内で行ってもらうことにしました。スピーチのレッスンの内容を私たちも知ることで、レッスン以外の時間にそこでアダムが学ぶコミュニケーションのとり方を継続することができ、私たちもお互いに学ぶことができると考えたからです。最初は、アダムのスピーチの時間になるとクラス全体がざわざわして、「御褒美の先生が来た」なんて騒ぐ生徒もいました。ほとんどの生徒がスピーチのレッスンを受けており、その先生は数種のちよつとしたお菓子とシールを御褒美として用意していることを知っていました。

アダムのスピーチのレッスンが教室内で行われるようになるということは、みんなにとつても環境の変化です。環境を変えらるゝことは、協調性とクラスのみんなの協力が必要になります。初回には手短かにアダムのスピーチのレッスンは教室内で行うようになることをそれぞれに説明しました。アダムのスピーチのレッスンの間、他の生徒達が自分達の教材やその時の個別授業に集中できるように必死の努力が必要でした。

アダムにとつての意味

何度かスピーチのレッスンを見ていて、気づいたことがあります。赤、青、黄色の識別をすることや数を一から十までスピーチの先生が数え、アダムが数字のパネルを指差していくことで「御褒美」を貰えなかったり、貰えたりしているアダムを見ていて私は首をかしげてしまいました。

スピーチの先生は積極的にアダムにアピールしてがんばっているのは手にとるようになるのですが、アダムは特に集中しそのレッスンに取り組んでる様子でもなく、「アダム！ ポイントレッド」（赤を指差して）と言われてもニコニコ頭を揺すり、先生に笑いかけたりしており、立ち上がってクルクル回ろうとしていました。時々うまくいって御褒美を貰えらるゝと、その御褒美を純粹に喜び、食べながらクルクル回らるゝといった感じでした。私が首をかしげてしまったのは、今アダムにとつて何より優先されるべき大切なことが、色や数字の認識であるように思えなかつたからです。

アダムの motivation

私たちが書かなければならない個別教育計画は、科目別で専門分野別に欄がもうけてあります。もちろんスピーチの先生も、その専門分野としてアダムの個別計画を書かなければなりません。マニュアルのようなものもあり、必要であれば過去の個別教育計画を継続する形で書き出すこともできます。しかし、ベスも私もその様な手順には不満を感じていました。

私たちは短いポジティブサポートのセッションを積み重ね、「アダムが興味のあること」や、「嬉しくなること」／「悲しくなること」、などという課題を行います。そして共通理解を持つことと、次に繋げていく為に話し合いました。私たちが大事にしたいと思ったことは、彼は人に認められることで心動かされる、人のリアクションがかなり影響力を持っているということでした。

そこで、「御褒美」は、食べるものではなく、別に

「アダムが楽しめるもの」に変え

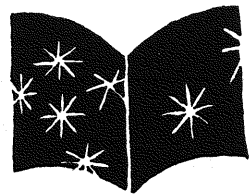
ることを提案しました。スキンシップやクルクル回ることや何か人と関わり楽しめるものをアダムの御褒美の「選択肢」とする。そうして、常にアダムがコミュニケーションをとり、アダムが選べることを増やすことが大切なのではないかと考えました。

では、どう選択肢を提示し、アダムが選べるように考えていくか。

アダムのコミュニケーション

アダムにとって意味のある、彼から発し直接誰かに表現できる具体的なコミュニケーションの取り方が見つかっていないという決定的な問題がありました。

アダムがわかりやすく、選び／表現しやすい方法とし



てベスが用意したのがPECS（註）でした。PECSは、単語が絵と文字でわかりやすく正方形の枠に表示してあります。アダムにとって必要な意味のある単語を私たちが一つ一つ切り落とし、ラミネートしてマジックテープでボードに貼り出します。そして、アダムがそのボードから表現したい単語を自分で取り出し、相手に示すことができるようになっていきます。アダムにとって必要なボキヤブラリーから始めるといふ発想なので、そのアダム用ボードは「アダムのボキヤブラリー」が羅列され増えていく形になります。彼の好きなもの（数種の食べ物、飲み物など）、彼が必要としている日常的な言葉（トイレ、休憩）から始め、徐々に数を増やしていきます。最終的には複数のボキヤブラリーを組み合わせセンテンスをつくり表現／やりとりできるようにすることを目指すのです。

アダムが生活の中で必要としている言葉はさすがに吸収が早く、PECSを指差すことから、それを取り出し相手に見せるようになるまで予想よりはるかに時間がか

かりませんでした。スピーチの時間にアダムは集中力が途切れると、自分からニコニコと「トイレ」を取り出しスピーチの先生の顔を覗き込みながら手渡します。その度にスピーチの先生は苦笑いしながら承諾していました。私たちは、それを微笑ましく見ていました。

生活の中で、自分が表現することが相手に伝わることの満足感と充実感／達成感を感じるようになったアダムは、いろいろなものが変化し、開けていく感覚を覚えていったのだと思います。その変化が生れると同時に、新たな問題が立ち上がってきました。今回は、アダムの「変化」と「問題」について書きます。

（ポジティブサポート研究室主宰）

註 PECS: Picture Exchange Communication Symbols (Mayer-

Johnson, Co. 1994)